

浄土

monthly
JŌDO

2013
September

9



2013
年『浄土』表紙の人

佐野芳朗



佐野 芳朗（さの よしろう）

走馬灯に手を翳しながら…

1939年愛知県は尾張瀬戸市、瀬戸焼の町に手打うどん屋の次男として生を受ける。瀬戸窯業の工芸を専攻、ノベリティーデザイナーに就く。

1962年上京、グラフィックデザインを学ぶ。

傍ら岡本太郎のアトリエで「かの子文学碑」ほかモニュメント製作に参加。

二科展デザイン賞、パフォーマンスとして「1000円作品展」活動 等。本邦初の「ボランティア」誌 40数年間製作。

全日本ろうあ連盟「絵で学ぶ手話」連作。

同時期、正力松太郎氏提唱の-全国青少年教化協議会-「おしえの泉」「びっばら」等の製作に協力。

最近は機関誌『浄土』にお招きをお受けております。
淀みの川を流れつ…

合掌

浄土

2013/9月号 目次

日本の仏教(Ⅱ)	梶村 昇	2
会いたい人 勘三郎の会った人々(上)	関 容子	12
響流十方	小村正孝	22
連載小説 渡辺海旭	前田和男	26
江戸を歩く	森 清鑑	34
Jフォーラム		43
誌上句会	選者=増田河郎子	44
マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	47
編集後記		48

表紙・表紙裏=2013「浄土」表紙の人 佐野芳朗

背表紙裏=泰雲の美味探訪



表紙題字=中村康隆元浄土門主

アートディレクション=近藤十四郎

協力=迦陵頻伽舎

講演概録「日本仏教讃仰会仏教セミナー」

日本の 仏教

梶村昇

亜細亜大学名誉教授

第二
回

異宗教の交流

仏教だからということで、インド、ネパール、中国などの仏教国を、全部一緒に考えてもいいのです。共通したものは当然あるわけです。しかし、それぞれ違うのだということも重要なことです。

それは、我々個人個人を見ても、個人個人の宗教というのは皆それぞれ違います。この話を聞いたから、皆これと同じになったなんてことはあり得ないのです。それを一つ宗教だと言って、右向け右で同じようにさせようというのは無理です。違っていてもいいのではないかと思うのです。

二番目です。「高度な宗教が、比較的低度な宗教を持つ民族文化に受容された場合、迅速かつ容易に伝播されていく」。難しいことを言っていますが、高いところにある水は低いところへ流れていくということです。

日本に仏教が入ってきた当時の日本の宗教は、仏教の持っているあの高邁な哲学こうまいから見れば、程度が低いものでした。ですから、日本に仏教が入ってきたら、すうっと流れた。それが小学校以来習ってきた奈良仏教、平安仏教で、国家仏教とも言われるほど盛んになった日本の仏教です。同じように仏教は中国にも入り、韓国にも入りました。どこにも入ってきた。水の流れと同じように高いところから低いところへ流れる。それが二番目です。高いところから低いところへ、たとえばヨーロッパ文化だってアフリカへ行くと、たちま

ち広まったのです。しかし、アフリカの文化がヨーロッパに入っても、たちまちには広がない。アフリカでも踊りは程度が高いらしくて、ヨーロッパの人がしきりにやっています。

三番目、「民族の持つ自然発生的な宗教は、高度な宗教に同化しつつ反発し、民族固有の宗教を形成していく」。

これはどういうことかといえますと、日本を例にとると、日本という国に仏教が入ってきた。たちまち日本は仏教国になった。そうしますと、今までの民族の形のある根っこの宗教はなくなってしまったのかというと、そうではない。その高度な宗教に同化しつつ、日本の宗教は仏教に同化しながら、民族固有の宗教を形成した。それが神道です。神道の教典、皆さん、それは何だと思われませんか？ 仏教の聖典はお経でしょう。キリスト教はバイブルです。それでは、あの神社の神道の聖典は何でしょうかね。

それは『古事記』だと思ふのです。神主さんの上げる祝詞のりとは皆、『古事記』からとっています。しかし、何もかも同化されるということではなくて、それに反発して、「おれたちの宗教はこういうものだ」と言つて形成していく。それが固有の宗教だということです。それが三番目です。民族固有の神道を形成してきた。

四番と五番は、高度な宗教間の接触において、例えばキリスト教が入っているでしょう。そこにイスラム教が来るでしょう。それが高度な宗教間の接触です。「高度な宗教間の接触において、既に一つの宗教が民族の中に確立され、その宗教を中心とした文化統合が行われているところでは、他の一方の宗教は容易に布教されない」。簡単に言いますと、キリスト教が布教されているところ、そして全部民衆の生活がキリスト教化しているような

ところへ、イスラム教が入ってきてても、なかなか入れないということです。これはちょっと問題なのですが、日本の場合を考えてみてください。日本の場合は大方は仏教です。そして、お盆から何から、皆仏教のしきたりでやっているでしょう。文化統合というのはいくちの意味です。一つの宗教の価値観によって統合されている。

余計な話ですが、私たちの今の国民の祝日を考えてみると、お正月から始まって、子供の日というのがあるでしょう。それから母親の日というのがあります。このごろ父親の日もあります。

ところが、祖先の日というのがないのです。それはお彼岸だと言われます。そのとおりお彼岸なのです。ところが、お彼岸だとは言わないで春分の日、秋分の日と言うのです。

春分というのは、辞書では昼と夜の長さが同じ日だと書いてある。どうして日本人は昼と夜が同じなら日本中でお休みしてお祝いしなければいけないのですか。これは国会議員に言おうと思っているのですが、それなら夏至も冬至もお休みにしてくれたい。春分とか秋分というのは、これは気象庁で使う名前です。

しかし、彼岸の日と言うと、憲法違反になる。なぜかと言うと、お彼岸というのは仏教の言葉です。そのお彼岸を国民の祝日にする、日本の政府は仏教の肩を持っていることになってしまふ。それでお彼岸の日と言えない。そこで春分の日とか秋分の日とか、気象庁の言葉を持ってくるということになるのです。それをやめて、祖先の日としたらどうかと思うのです。

さてそういう点で、一つの宗教、日本なら仏教というものが国民の中に定着している、文化統合が行われているところへは、ほかの宗教が来ても、なかなか入れない。

日本にキリスト教が入ってきたのは、キリシタンのときからですが、そのあと鎖国になり、明治になって、信教が自由となって、キリスト教の布教も自由になった。明治六年です。

それから今年までを計算しますと、百四十年くらいになりはしませんか。その間、日本でキリスト教が随分布教された。キリスト教が禁じられたということはほとんどありません。あの大東亜戦争のとき、数年間、バタバタしたことがありますが、それ以外は全く自由でキリスト教は布教できた。

キリスト教は財力もあり、環境が整っています。それなのに、どうして日本では広まらないのでしょうか。

それは四番目の、「その宗教を中心とした文化統合が行われているところでは、他の一方の宗教は容易に布教されることはない」ということだと思っています。

キリスト教にも問題があるし、仏教にも問題があるのです。キリスト教に言わせると、仏教が今、檀家制度で広まっているが、余り民衆化しすぎてしまった、と。クリスチャンはそこへいくと、「おれはクリスチャンだ」というような顔をして、斜に構えている。そんなことでは宗教というのは民衆の中へ入れない。本当に裸になって入っていかなければ、入れないと思うのです。

キリスト教の統計をごらんになってください。毎年クリスチャンが何人ぐらいふえたか。ある年なんか三百人です。一年間でですよ。カトリックとプロテスタントの両方合わせて三百何人という増加です。

今、カトリックとプロテスタント合わせて百万人に届くか届かないかというところです。

明治六年から今日まで百四十年あって、自由にキリスト教を布教できる環境にあっても広まらない。

五番目、「高度な宗教間の接触の場合、一方の宗教が、いまだ十分に民族の間に定着していないときは、政治的、社会的結合力の強い宗教のほうが大勢を支配する」。これはキリスト教とイスラム教の対立のことを言っているのですが、ここではあまり関係ありませんので省略いたします。

異宗教の交流というのは皆こういうものです。ですから、宗教はほかの民族に伝えられた、伝播されていったときにはその国の民族と一緒になって変容されるのです。例えばAの文化がBという地域に入ると、Bの宗教は皆Aとイコールになるといふふうに思いがちですが、実はそうではありません。宗教というのはここからこっちへ移るとき、必ず移った国のものになるのです。

先ほどから申し上げているキリスト教の話でも、キリスト教がギリシャに移ったとき、既にこれはギリシャ化されているのです。そしてその後キリスト教がヨーロッパでどんなふえます。そして、十五、六世紀にヨーロッパで宗教改革が行われ、プロテスタントが生まれ、今までの宗教カトリック、それに反対したギリシャ正教が生まれます。

そういうふう to 今日、キリスト教の宗派の数というのは大変なものです。皆それぞれが「自分はイエス・キリストの正統を守っている」とおっしゃる。それはそのとおりで、そうでなければやりようがありません。

だけど、皆その国々に変容されたものです。だから、仏教が日本に入ってきてても、それがミャンマーやタイ国の仏教と日本の仏教と同じだということは絶対ありません。必ず

宗教は、その受容された国の宗教と一緒に変わっていくということです。だからキリスト教は皆同じだなんて思わないでください。

私は北欧へ行ったことがあります。北欧のキリスト教というのは、実は元々北欧の宗教というのがあったところへ入ってきたものです。今はカトリックになっております。

あそこの十字架を見てください。十字の交わったところから四方にギザギザが出ている。このギザギザは何かという、土地の農業の神様の象徴です。農業の神ですから稲光です。農業の神様とキリスト教とが合体している。

余計な話ですがイエス・キリストが十二月二十五日にお生まれになったなんていうのは、どこにも書いてありません。ところが今、世界中、クリスマスは十二月二十五日です。

それはなぜかと言いますと、この北欧の宗教なのです。北欧という国は本当に夏が短く、冬が長い。冬至というのは夜が一番長くて昼間は短い。ですから、北欧の人は冬至になると、あしたからは昼間の時間が少しずつ長くなると言って喜ぶ。そこで冬至の祭りというのを大変熱心にやるのです。

私は北欧に行ったとき、その冬至にぶつかった。それが十二月二十五日です。

それとイエス・キリストのお祭りが一緒になってクリスマスになった。それが世界中に広まったということです。

誕生日なんていうのはそういうものです。皆さん、自分の誕生日は何月何日とおっしゃるけれども、ご自分で見ていたわけではないでしょう。皆、お母さんがあとで言ってくれたのです。それを信じているだけです。

だから、クリスマスが十二月二十五日、日本の建国記念日が二月十一日、それでいいの

です。二月十一日は歴史的にどうのこうのなんて、そんなことを言う必要はない。それは定かにはわかっていないのだから。皆で決めて、長年そうやってやれば、それに従った方がいいのではないかと思うのです。

民族の三つ子の魂

異宗教交流の話で、私の言いたいことはその次です。

一番は、民族にはそれぞれ民族の三つ子の魂というものがある、ということ。

二番目、異文化が交流する場合、民族の三つ子の魂が原動力となって相手を変容する、ということ。これが今日の話の中では大切なことでして、文化が交流する。日本の場合ですと、日本に仏教が入ってきた場合です。

日本民族の三つ子の魂というものがあつた。ここで言う私の根っここの宗教です。根っここの宗教が原動力となつて、入ってきた宗教を変容する、変えていくということです。仏教は日本の持つている根っここの宗教によつて、だんだん変えていかれた。それが今日の私のテーマとしている日本の仏教なのです。

最初から何遍も申します。時は永遠の慈悲だという、それはお経に書いてない。しかし、日本人は、「そうだ、そうだ」と、頷きます。

これは仏教經典に書いてないから仏教ではないというのではなくて、入ってきた仏教的なものを、日本の心、日本民族の心、民族の三つ子の魂というものが、そのように変えて

いったのだということです。だから、これが「日本の仏教」なのです。

先ほどタイ国の話を長い間いたしました、ちょっと言い忘れましたので、追加しますが、サンプラーンというのをタイの人に「これは何を祭っているのか」と聞くと、こういう答えが返ってきます。「これは私たちの先祖の心だ、先祖を祭っているのだ」と。

それだけでも日本仏教と大変な違いです。日本の仏教は、後ほど申しますが、祖先を祀る仏教です。ところが、タイでは仏教では祀っていないのです。そのサンプラーンで祀っているのです。

私は、亜細亜大学というところへ長い間勤めていたのですが、あそこにはアジアからの留学生が非常に多く、私はアジアの宗教というのをテーマにしていたものですから、留学生がよく私の部屋へ来ました。

あるとき私の部屋へタイ国の女性の留学生が訪ねてきて、私がちょうどサンプラーンの写真の整理をしていますと、それを見て言った。「私の亡くなったお母さんがここに入っている」と。タイの留学生にとっては、このサンプラーンは亡くなった祖先の入る場所なのです。

それがどうして田んぼの中に建っているかという、これは稲の神様でもあるからです。それがどうしてホテルに建っているのかというと、これは土地の神様だから。つまりサンプラーンは言ってみると祖先の神様であり、稲の神様であり、土地の神様であるのです。そういうような役割を持っているのです。

これは仏教ではありません。タイ国の昔からの宗教なのです。そこへ仏教が入ってきて、あれだけ熱心なタイ仏教になったのです。あれだけ熱心なタイ仏教になりながら、それで

もなおサンブラブーンは捨てない。それどころか、非常に熱心に祀られている。私のような旅行者でさえ、あちらこちらで目につくほどあるのです。

そういうことを見ますと、本当に民族の三つ子の魂というものは、消えてなくならない。それが原動力となって宗教を変えていく。日本の仏教も日本民族の三つ子の魂が変えていった。

それから三番目、民族の三つ子の魂は消滅することなく、常に民族の底流となっている、これは消えてなくならないということです。

タイ国に仏教が入ってきたのは文献の上では七世紀ですが、彼らは四世紀ごろだと言っています。非常に古いのです。そのサンブラブーンが今でも民族の底流となってタイに流れているということです。

この根っこの宗教というのは実に強い。それが日本の仏教を作り、タイの仏教を作ったと言えます。ミャンマーはミャンマー、スリランカはスリランカ、皆それぞれ同じ仏教ではありながら、それぞれの民族の力が原動力となって、それを変容しているのです。

(つづく)

連載

会いたい人
関 容子

特別編

勘三郎

の
出会った

人々

上



若かりし頃の勘三郎さん。

宮沢りえ

勘三郎が三十七歳でまだ勘九郎だったとき、女性誌「CREA」で何人か自身の会いたい人を指名して対談のホストをとめた。今読み返してみると当時とまた別の感慨がある。たとえば第一回のゲストは十九歳だった宮沢りえだが、対談の最後に中村屋はこんな約束をしていた。

「一つだけ約束しましょう。権太（『義経千本桜』のいがみの権太）をまた三十年後に見てください。りえちゃんはもしかすると相撲部屋のおかみさんになつてるかもしれないけど、僕は六十七で間違いなく歌舞伎役者をやつてますから、りえちゃんがいても上がらないで、立派に権太を演じてみせます」

そんな約束もむなしく、中村屋は五十七歳で世を去り、最後に権太をつとめたのは勘三郎襲名の翌年九月の平成中村座（名古屋）、

五十一歳のときだった。

「今度はりえちゃんの前でも上がらない」と言っているのは、対談に先立つて宮沢りえが初めて歌舞伎を観に来ることになり、二階の最前列に席を取るようマネージャーに言っておいたのに、手負いの権太のちょうど目線の行く席にいたりえさんと目が合つて、それから芝居がカタカタに崩れたからだという。中村屋の辞書に「上がる」なんてことはないはずなのに、とても珍しいことだ。

一方、宮沢りえは初めて観る歌舞伎がひどく新鮮に映り、大向うが役者に屋号で声をかけるのにも素朴な疑問を抱く。

対談の数日後、中村屋が弾んだ声で言っていた。

「どうして権太の役になり切っている人に『中村屋！』なんて言うのかしら。『権太さん！』と言うべきじゃないのかしら。もし私がジプシーの役をやつて、『宮沢！』って言われたら、何かシラけるような気がするん



です、って言ってたけど、これ、本当だね。それまで考えたこともなかったけど、すごい感性だと思って、感激しちゃった、俺」

中村屋が宮沢りえと会ってみたくなった理由には、多少私にも関係がある。

私の『おもちゃの三味線』というのは、先代幸四郎（白鸚）に対する初代吉右衛門の一人娘で十五も年の違う正子さんの一途な恋の話を書いたものだが、これがその後ラジオドラマになって、主演したのが正子さんの孫の市川染五郎と、宮沢りえだった。

ドラマには現・幸四郎が先代の役、現・吉右衛門も先代の役、中村屋も父勘三郎の役で特別出演。と言っても、それぞれのお宅や楽屋で短いせりふを収録し、うまくはめこむという形の出演だったけれど、大変に贅沢なことだった。

あのころまだ十歳そこそこだった勘太郎（現・勘九郎）君が笑いながら、

「お父さんね、車に乗るとあのドラマばっか

り聴いてるよ」

と教えてくれたが、中村屋はきつと宮沢りえのいかにも利発そうでいて情感のある、透明でいて力強い声の魅力に惹かれたのだろう。

それで、念願の対談が始まってしばらくしたら、突然部屋の電気が消えて薄暗くなった。

「でもこうやって暗いところで話すのも面白いですね」

と、りえさんが中村屋の顔をのぞきこみながら訊く。

「勘九郎さんて、少し怖がりですか？」

「ええ、怖がりです。水上スキーは好きなのに潜るのは嫌い。何か出てきそうだから。映画の『ジョーズ』を見たあとギリシャの海に行っただけで、ダメだったもの。すぐに海から上がっちゃった。空もダメ。スカイダイビングなんか、『鳥になった気持ちになれる』なんていうけど、『バカヤロ、バラシユートが開かなかつたらどうするんだよ』って感じ（笑）」

ギリシャの海、というのは、太地喜和子と初めて行ったエーゲ海クルーズの時のことだろう。何かにつけて思い出すらしい。

しかし、自分は怖がりでも、人をおどかすことは大好きで、対談ではこんなことを言って受けを狙っている。

「四国のこんぴら歌舞伎というのがあって、江戸時代からある古い小屋なんだけど、今日みたいにこんな感じの暗さにして『四谷怪談』を今度やりたいと思ってるんだ。終演後、お化けの扮装のまま石段のところに立ってて、お客さんをおどかすとかしたらきつと面白いよね」

あのこと、この思いつきがよほど得意だったとみえて、「もしそうやってお客さんが目を廻してもしたら、業務上過失致死傷害の罪になるんだろうか」と、あちこちで言っていたみたいだ。

このこんぴら歌舞伎の『四谷怪談』は、ついに実現しなかったが、代りに第一回クー

ン歌舞伎では似たような小屋の雰囲気を作つて『四谷怪談』を上演した。

開演前に私が楽屋に顔を出すと「ねえ、席はどのへんで観るの？」と妙に熱心に訊く。怪しい、とビンと来たので用心していたら、案の定お岩様が棧敷まで出張サービスに来てくれた。私は隣りの友人にかじりつき、絶対に顔を上げなかつたら、トントン、トントンと私の頭を軽く二回叩いて（その感触が今も残っている）諦めて帰ってくれた。でももしりえさんが同じ日に観に来ていたら、私のところへなど来なかつたはずだから、いい思い出ができてラッキーだった。

また対談に戻る。

中村屋が、たとえば『鯛売』（三島由紀夫作）なんかを元にしてりえちゃんと歌舞伎座で共演したいけど、と実現性のない夢を語ると、「なぜ歌舞伎に女の人が出ちゃいけないんですか」

と反問する。

「鋭い突っこみに参っているノリちゃんなんだけどね」

とおどけながら時間を稼いで、「女優さんだと何だか生な感じがしてメルヘンになりにくいんだな。ワンクッションないつていうのか……」

と、まともな答えにたどりつく。

そして『鯛売』の筋を説明。

「鯛こーえー」という鯛売りの売り声に魅せられたやんごとないお姫様が、その声に憧れ出て、やがて遊女になる。その螢火という太夫を見初めた鯛売りが大名に化けて会いに行くが、寝言に「鯛こーえー」と言ったことから正体がばれ、めでたしとなる。

それを聞いてりえさんが、すかさず言う。

「面白そう！　じゃ、練習してこつそり出ちゃいましょうか。玉三郎さんの代りに二日間だけとか（笑）。『鯛売』今度いつやりますか？」

中村屋はタジタジとなり、

「うーん、この間やったから、三年先かな。でもやっぱり歌舞伎じゃ俺もまだ弱い立場だからな……悔しいねえ（笑）。だけどオペラに対してオペレッタがあるように、歌舞伎のいろんなしきたりを取り払って、歌舞伎を素材にした芝居。そうだ、『カブキッタ』というのをやろうよ」

と、思いつきに得意になりながら、「でもなあ」と考えこむ。

「どうしたんですか？」

「そうすると、りえちゃんの相手には東山（紀之）かなんか連れてこられたりするからなあ、気がついたら俺、下僕の役だったりして」

「私はいや、と言って、勘九郎さんとやりますから」

「そうお？ 嬉しいね」

となるのだが、宮沢りえ、十九歳にして自分に満ち、余裕と貫禄さえ感じられる。

のちに歌舞伎座ではないにしろ、『天守物

語』（泉鏡花作）でル・テアトル銀座の舞台に立ち、玉三郎や穴戸開と堂々の共演を果たし、最近では『おのれナポレオン』（三谷幸喜作）で、急病で途中休演した天海祐希の代演をこく短時間の稽古で立派にやってのけて、名を上げた。

中村屋が生きていたら、既にあの対談のときからこの女優の大成はわかっていた、とさぞ自慢に思ったことだろう。

杉村春子

この対談は太地喜和子が亡くなった翌（平成五）年、信濃町の文学座アトリエ（稽古場）に中村屋が出向いて行われた。

「いいなあ、こういうところに来ると、霊的なものを感じますね。役者さんたちが悩んだり苦しんだり、喜びあつたりした『思い残し』みたいなものがそこに散らばっていますものね」

と、何度もあたりを見回してちよつと感傷

杉村春子さんと対談する勘三郎（当時勘九郎）さん。
1993年5月号の『CREA』にて。

©久家靖秀



的になる。

以前、高麗屋一家（白鸚と幸四郎・吉右衛門兄弟）が『明智光秀』（福田恆存作）で文学座と共演したときも、このアトリエで稽古をしたと聞いて、ますます感慨に浸る。

杉村さんが、「これ、言わないほうがいいかしらね」とためらいながら、先代勘三郎と共演したときの話を始める。

「あなたのお父さん、『華岡青洲の妻』（有吉佐和子作）で御一緒したけど、せりふを憶えない方だったでしょ。水谷八重子（初代）さんが青洲の妻で、私が母で、麻酔薬の実験で誰が先に飲むかで争うところがあるんだけど、そしたらあなたのお父さん、何が何だかわからなくなつて、真ん中に敷いてあった布団に引っくり返って、「トクちゃん」て情けない声でプロンプターの方を呼んだのよ（笑）」

「ああ竹柴徳太郎、徳ちゃんです」

「青洲が久しぶりに家に帰ってくるところで

も、せりふがわからなくなつてそのまま立つてたら、お客さんが『しつかり言え』って。そしたらあなたのお父さん、『何言つてやんでえ』って、おつしやつたんですよ（笑）」

中村屋は大笑いして、「僕はせりふを憶えないと心配で出られないから、これは親子でも違ふところですよ」と言いながら、話はやっぱり太地さんのことになる。

「僕は文学座の方々と御一緒にずいぶんいろいろ教えていただきましたが、喜和子さんとは何にも共演しないで終つてしまいました。舞台はおろか、テレビも映画もラジオも雑誌の対談も何にもなくて、もうそろそろいいよね、つて話してたんですけどね」

杉村さんはまた「いいのかしら、太地さんの話をして」と断つて、

「あの人があんなに雰囲気のある舞台を作れるようになったのも、あなたのおつきあいがあったからだと思うんですよ。あの人はあなたのことをとても好きだったらしかった。

何の舞台だったかしら。ほとんど毎晩のようにあなたを見に歌舞伎座へ行つてたことがあつたわね」

中村屋は「初役の『鏡獅子』です」と即座に答える。昭和五十一年四月、歌舞伎座。二十歳のときで、いちどきに大輪の花が開いたようなその天才ぶりが評判になったものだった。

「毎晩見ていれば、いいか悪いかもわかるし、自分が演らなくてもいろんなことを覚えるものですよ」

「ええ、本当に毎日来てくれましたから。でも僕もいろいろ教わりましたよ。『あなたはほんとに聞くのが下手な人だから』って。いくらしゃべるのがうまくても聞くのが下手な役者はダメなんだ、つて」

「あの人は誰にでも正しく怒るのよ。北村和夫さんなんかもよく怒られてましたから」

そして中村屋は、どんどん喜和子さんの不在を実感して行く。

「杉村さんとこんな話をしていて、ここに彼女がいけないはいけないなあ。本当にいけないよな。まだ死んだって感じがしないんですから」

この言葉はそのまま中村屋に返したい。

「私だってそう。そこらにまっ赤な車を停めて、今にもあの人が降りて来そう。去年の夏のビアパーティーにも来てくれたもの」

「去年、四月九日にお袋が死んだとき、彼女が一番先に来てくれた。その彼女がもういないんだから、変ですよね」

「本当に変ですよ。人生って何があるかわからないわね。まだこれからだったのに。若さというのは、きれいだったり花やかだったりするけど、役者が本当に美しく見えたり、艶やかに見えたりするのは、もう少し年を取ってからなの。あなたはまだ若いから、これからだんだんわかると思うけど」

やがて杉村春子一代の当り役『女の一生』

(森本薫作)の布引けいの話になる。

「不思議なことに、十六歳のけいが以前より今のほうがおかしくない、って言われるの。ラブシーンも今のほうが情熱的に見えるそうです。これ、自分のことを客観的に見られるようになるからで、人間、内面が豊かになつてくると、もつと若さが出せるんでしょね」

「歌舞伎も同じだと思います。禿かぶの役は、子供だから子役がやればびつたりなんだけど、六十過ぎの人がやるともつと可愛らしさが出るんです。僕らくらいが一番中途半端かもしれません」

中村屋はちよつと前に歌舞伎座で踊つた『戻駕』の禿かぶのことを言っているのだった。幕になつて、大先輩の梅幸の楽屋へ挨拶に行くと、「哲ちゃん、いくつになつた？ 三十六？ この役大変だろ？ でも僕はもつと年がいつてからも踊つたよ」と言われたそうだが、でもこのときの中村屋の禿かぶたよりは何とも初々しく、あどけなくて愛らしかった。恥ずかしそうに客席に向い、顎を上げてうなず

くようにお辞儀をすると、場内がドツと沸いて、私は勘九郎坊やだったところのお客のどよめきを思い出していた。

中村屋はもしかして還暦で禿を踊るつもりだったかもしれない、とふと思う。しかしあれ以来、中村屋の禿が観られなかったのが残念だ。

杉村春子がしみじみと言う。

「芸の完成なんて一生ないんじゃないですか。もうこれでいい、つてなつて、それを繰り返しているんじゃないでしょ。年々多少は進歩してる。何か違ったことになつてゐる。それで舞台と客席が一体になつた嬉しさというのは、たとえられない喜びよね。年に何回もあることじゃないけど、それがあから役者はやめられないんじゃないかしら」

中村屋もハツと思ひ当る。

「よくわかります。『娘道成寺』を踊つたとき、三味線とか鳴り物とかと一体になつて、笛の名人の笛の先から突然桜の花びらが飛び

出すように見えたことがありました。そのときの踊りはきつとうまくいったんだと思えるんです」

杉村さんは、少年時代の中村屋のやんちゃな姿を思い出して、その成長ぶりに感無量でいると、唐突に中村屋が切り出した。

「先生、こんなこと言つたら叱られるかもしれないけど、よくせりふが頭に入りますね。えらいなあ。お年は僕より上なのに」

「あなたより下だつたら困っちゃうわよ」

「先生、おいくつですか？」

「もう、わからないくらいになつちやいましたよ」

「いいなあ、そういう言い方つて（笑）」

年齢の開きを超越し、でもお互いにある境地に達している役者同士の会話。

中村屋はこの夜、喜和子さんの思いの残るアトリエで、大先輩から話を聞いて心がなごみ、きつと幸せだつたに違いない。

（この項つづく）

自分こそ自分の主である。
自分のよりどころは自分である。
だから自分をととのえよ。

(初期経典「法句経」380)

「知る」権利、「知る」責任

過日、財団法人全日本仏教会が東京・秋葉原で開いた講演会「新出生前診断を考える」を聴講してきた。最近、よく報道で取り上げられている「新——」について、仏教界として生命倫理の観点から考えてみようという趣旨だ。

胎児の状態を調べるエコー（超音波検査）などの「出生前診断」が行われるようになって久しいが、「新——」は胎児に重篤な病があるか否かの可能性が、母体から採取した血液の遺伝子を調べることにより、かなり高い精度でわかるというもの。採血という、母体にも胎児にもダメージを与えない方法で、高精度な診断が可能という点で優れた検査法と評価されており、約二十五万円という費用にもかかわらず今年四月の「解禁」以降、受診者は増加の一途だという。講演では、この診断でわかるのはあくまでも「可能性」であり、陽性が出ても百パーセント直ちにそれが重篤な病を抱えていることを意味するものではない、という点であることが強調された。「新——」で可能性が疑われた場合、受診者が「確定」を希望すれば、羊水検査や絨毛検査（じゅうもうけんさ）といった検査を受けることになる。羊水検査の場合、流産のリスクが〇・三から〇・五パーセントの確率で伴うともされる。

登壇された三名の講師のうち、明治学院大学教授柘植あづみ氏の講演がとく

に聴衆を惹き付けた。氏は羊水検査を「受けた」、あるいは「受けようと考えた」人たちに対しアンケートに協力してもらい、その結果を発表。そこには、実になまなましい心境が吐露されていた。

「大丈夫（陰性）だとは思いますが、安心して産むために受けた。結果的に異常が見つかりものすごいショックを受けた。夫と相談し、悩んだ末に中絶した」

「もし障害の可能性がわかったら、妊娠の中絶を判断するような状況に立ちたくなかった。それが怖くて受けなかった」

ここで、出生前のさまざまな診断の是非を論ずることや、検査を希望する人、しない人の考え方に何か判断を下そうというのが、本稿の意図ではないことをお断りしておく。柘植氏の発表から、さまざまな「情報」というものとかかわることが、いかに難しいかということに思いをめぐらしただけである。

「情報は少ないよりは多いほうがいい」。この考え方は少なくとも間違っている。古来情報とは、何につけ勝敗を決する重要なファクターであったし、日常でも、たとえば情報がたくさんあれば、より「おトク」な買い物もできる。情報の増加は選択肢の増加につながり、決して悪いこととは思えない。いや、すでに「情報」がなければ生活は成り立たない。「情報イコール生活」である。

しかし私たちは、そうした必需で便利な、しかしながらあまりに大量にあるがゆえに翻弄され、悩み、苦しむこともある。時には残酷な現実を突きつけることもある。今や、「知りたい」と思ったら、さまざまな手段により社会一般的なことから特定の人のプラバシーに関することまで、ありとあらゆる情報が入手可能だ。願うと願わないとにかかわらず、向こうから飛び込んでくることもある。もちろん膨大な情報の中には「間違い」（中には故意に曲げられたものも）も多分に含まれており、正誤を判断することも要求される。真実でない情報を信じ込み、妄想が肥大して不適切な行動を起こし、自己をも他者をも不幸にしてしまうことすらある。知らなければ知らないで、誰も困ることはなかった、そんな経験を持つ人も少なくはないだろう。「知る」ことが容易になった分、「知った」以上はそこに大きな責任が付随することも増えている、ということだ。

いくら考えても、こうすればいいといった結論など見えてこない。とはいえ私たちは、「情報」というものが持つ二面性を十分に再認識しておくことだけは迫られていると言えるだろう。少なくとも、「情報」は、こちらが「使う」ものであって、「使われる」ものではないはずだから。最終的に判ずるのは、自分自身、ということにならざるを得ないようだ。

（小村正孝）

小説
快僧渡辺海旭

壺中に月を

求めて

前田和男

第四十四回

第二部

来江ライエンの古城遥かなり

碧眼の比丘、ニヤーナティロカ その3

思ひ出の「しっぺ事件」

碧眼比丘、ニヤーナティロカのぼっちゃりとした白い手の甲へ目がいった渡辺海旭は、浄土宗学東京支校時代の「しっぺ事件」を思いだした。

東京支校に入学して半年ほどたったころだろうか、同級生の間で勉強の息抜きにと、舶来のトランプ遊びがはやった。持ち込んだのは、有力な寺の子弟で、海旭よりも三歳年上だった。宗門制度の改革によって、教師と教師補という「資格」が正式に定められ、教師は宗学本校高等科、教師補は宗学尋常科を卒業した者とされた。つまり、少なくとも宗学支校に入学して三年の尋常科を卒業して、伝宗・伝戒を受けなければ、浄土宗の僧侶にはなれないことになった。有力な寺を継がせたい、あるいは海旭のような才能を宗門に生かすためには、まずは宗学支校に入学させる必要があった。そのために、第一期生には、年長者が多数いたのである。

トランプ遊びを持ち込んだ同級生もそうした教師補取得狙いで、裕福な檀家から贈り物にもらい、その遊び方も教わったのだという。参加者に五枚ずつ札を配り、残りの札の山を順繰りに数回引いていき、数字の合計の多寡で勝負がきまるといふ、いたって単純なものだったが、ろくに遊びもない時代だったので、同級生たちはわれもわれもと大いに興じた。

檀家たちはお金をかけていたらしいが、さすがに宗門の学校ではそれはばかられるという年長者の提案で、負けたら残りの全員からしつぺを受けるといふことになった。

誘われるままに海旭も参加したが、最初はトランプ遊びそれ自体よりも、札の華美な絵柄に興味を覚えて、配られるたびにカードの裏と表をひっくりかえしてはためつすがめつしているの、ゲームについていけず、「おい、渡辺、お前の番だ。はやく札をひけ」とせっつかれる。だから、たいがい海旭が負けて、しつぺを受けることになった。

しかし、回を重ねるうちに、いつもの負けん気がむらむらと湧いてきた。駆け引きのつぼもなんとなく分かるようになってそろそろ勝てそうな気がしてきたが、そのころには、就寝の時間がちかづいてきた。

「そろそろ、終わりにしよう」と年長が言うのに、海旭が「もう一回」と食い下がった。

これまでほとんど負け続けて、さぞや手の甲が腫れているだろうと思つて、同級生が心配して言った。「おいおい、渡辺、いい加減にしておけよ、でない」と、手が痛くて眠れなくなるぞ」海旭は平然として手を差し出すと、「な、なに、ほれ、こ、このとおり、た、たいしたことはない。さあ、もう一回……」

同級生たちは辟易とし、最年長生が言った。「渡辺、お前の手の甲は厚くて、さっぱりしつぺがきかない、きかないどころかこつちが痛くなるから割に合わない。いったい、お前は坊主になる前に何をしてたんだ」

気まずい空気になりかける前に、海旭は答え

た。「は、博文館で小僧をやっけていてね。よく大八車を引いてお目様の下で物を運んでいたの、つ、面の皮と一緒に、て、手の皮も厚くなったのかもしれない。諸君は、せっかく勝ったのに、かえって痛い思いをするとは、こ、これがほんとのしっぺ返しだ」

この落ちの一言で、一同大笑いとなり、その場はなごんで終わったが、部屋に帰ってから、海旭は、自分は彼らとは違うのだということをつくづくと嘯みしめた。同級生のほとんどは浄土宗の大きなお寺さんの子弟で、海旭とは氏も育ちも違っていた。箸より重いものを持ったことがないようなお坊ちゃんばかりで、たしかに手のひらもふつくらとしていた。あれではしっぺするほうが痛くなるはずだった。

反ユダヤ主義と仏教の相関

回想からさめた海旭は、いま一度ニャーナテイロカの手のひらをさりげなく見ると、それは往時の同級生たちと同じように、いやそれ以上

にふつくらとしていた。

それに気づいた碧眼比丘は、ふたたび「なにが私の手が……」と怪訝な声をもらした。海旭は自分の手をさし示すと「ほれ、このとおり、私の手は無骨でして。それは幼い時分に……」と返し、仏門に入るまでの生い立ちを簡単に説明すると言った。「なにからなにまでこうも違う人間がこうしてあい結ばれるとは。これぞ仏縁だと実に感慨深いものがあります」

「私も同感です。貴僧は十五の頃から仏門に入られたのですか。いっぽうの私はというと、仏陀の因果律（ダルマ）と出会うまでに、ずいぶんと時間もかかり、曲折もありました」と碧眼の僧侶は中空をみつめた。「さて、どこまでお話をしましたかな」と一息ついた。「そうそう、フランクフルトの菜食料理店でしたか。それで……」と、再び比丘になるまでの経緯を次のようにとつおいつ語りだした。

菜食料理店に入り浸るうちに、神智学のエトヴィン・ペーメを知り、その講演を聞いて、仏

教に強い関心をもつようになるが、それに惹かれたのは理性的というよりも、情緒的な関心からだ。理性をもって確信する契機となったのは、フランクフルト高等音楽院でバイオリンの指導を受けていたバツサーマン教授から勧められた二冊の著作であった。一冊はツイマーマンがスプハドラ・ビクシュの筆名で著した『仏教の教義』、もう一冊はフングストの『仏陀の生涯と業績』であり、この二冊によって、いつかは仏教の聖地に行つて僧侶になろうとの想いがニャーナティロカの胸中に萌もぎしたのだが、決断はまだできなかったという。

「書斎派」という言葉が海旭の胸裏をよぎった。自分はドイツから帰国後、「浄土宗労働共済会」なる細民救済活動を即座に始めてしまったが、考える前に身体が動いてしまうそんな「現場派」の自分とはずいぶんと違う。じつくりと考えて、いや何度も行きつ戻りつしながらやっと思慮決意をする、留学中に彼の地でしばしば出会ったドイツ知識人の典型だった。そんな感想を覚え

ながら海旭は引き続き役に徹した。
碧眼比丘は茶をゆつくりとすると、つづけた。

「悟性と感性の両面から、私を最終的に仏門へ向かわせてくれたのは、そう、パリ高等音楽院（コンセルヴァトワール）に留学が決まって、そこで出会った勉強仲間のルーミアニア人でした。国は同じでも一方はユダヤ人の二人組、片方は反ユダヤ主義者の貴族と立場は真逆でしたが」

海旭は思わず「ほう」とつぶやいて、身を乗り出した。反ユダヤ主義はかねてからヨーロッパでは社会の根底をゆるがす大テーマであり、海旭も留学中に見聞したが、最近、西欧では台頭著しいと聞いて懸念をしていた。

「ユダヤ系ルーミアニア人の二人組とは、すぐに気があって、音楽の勉強そっちのけで、トルストイやプラトンなどを読みふけりましたが、もっとも影響を受けたのは、彼らが勧めてくれたフォイヒタースレーベンスレーベンの『魂の療法』でした。

とくに『精神的な病いは誤った思考法から生まれる。最大の愚行は苛立ちと怒りである』の箴言は、まさにあらゆる欲望を絶つことこそがあらゆる煩惱から自由になれるという仏陀の解脱の教えに通じるもので、いつそう仏教への確信を深めました」

碧眼比丘は窓外に目をやると雲に懸かりそな月をしぼし見つめた。

「もう一人のルーマニア人の反ユダヤ主義者だが、これが大変な大人物でした。ルーマニア王家の落胤で、作曲をさせたら、もはやバリ音楽院で学ぶ必要などないほどの異能で。彼の庇護者はカルメン・シルヴァ。そう、ルーマニアのカール一世の王妃、エリザベス妃の芸名です。王妃は音楽と文学に造詣が深く、まさにプロはだし。その彼女のために彼は歌を何曲か提供。作曲家志願の私は大いに憧れましたが、それよりも圧倒されたのは、音楽以外の教養、詩や哲学などこの上なく豊かな学殖です」そこで碧眼比丘は窓外の月に目をやって一息ついた。「と

どめは、あれはコンセルヴァトワールで知り合って半年ほどたったときのことでした。彼にこう訊ねたのです。私もあなたのように作曲の技芸をみがきたい。やはり音楽だけではだめで、あなたのように幅広い教養が必要なのですね。すると、ルーマニア貴族の反ユダヤ主義者は、首をふって、いや、そんなものは作曲の発想にはとるにたりない、といったのです」

碧眼比丘はまたまた一呼吸置いた。海旭は待ちきれずに、「では、何が決め手なのだと」と答えを促した。

「ルーマニア王家の落胤いわく。実は、私はクリスチャンから仏教徒に改宗、帰依した。仏陀の教えこそが私に曲を生みだしてくれる聖なる泉だと知ったからだ。これで、私も仏教徒に改宗しようと心に決めたのです」

演奏旅行で稼ぎながら仏教の聖地へ

反ユダヤ主義と仏教、そして音楽・芸術。この相関こそ、いかにもドイツ的だと海旭は思っ

た。いっぽうでわが国でもいずれ反ユダヤ主義と仏教の関係が課題になるという予感があった。しかし、この問題をここで論じていると隘路、迷路へ分け入ってしまうおそれがある。議論を現実に戻すべく、海旭は訊ねた。

「それで、仏教に帰依するために、どんな算段を」

「とにかく得度の儀式を受けねばならない。そのためにはインド南端の島、セイロンへ行こうと。でも、手元不如意でインドまでの旅費の工面がたたなかつた。が、やがてそのチャンスがめぐってきたのです」

といって、碧眼比丘はこんな経緯を語った。

パリのコンセルヴァトワールで師事した、有名なオルガン奏者でオペラ作曲家でもあるシャル・マリー・ヴィドールから、彼のオーケストラでピアノの正楽団員に起用され、それが機縁で各地から演奏旅行の仕事の口がかかるようになったのである。そこで、彼は出演料よりも、また演奏の内容よりも、仏教の聖地へ近い土地

を最優先するという作戦をたてた。そして、パリのコンセルヴァトワールを二年で修了すると、ベルギーでの魅力的な仕事をあえて断って当時はトルコ領（現在はギリシャ領）のテッサロニキへ。そこに九ヶ月間滞在、バイオリンの巨匠で仏教への関心が高いドラッカー教授と親交をふかめると、少しでも最終目的地であるインドに近づこうと、イスタンブール、イズミル、キプロス、トリポリ、ベイルート、ハイファを経由して、十二月三十一日にエジプトの港町、アレクサンドリアに到着。そこからカイロに向かうと、高級ホテルでベルギーのオーケストラのピアノ奏者に雇われたのも束の間、ホテルが賭博主宰の廉で警察の搜索を受けて失職。それでもめげずにポートサイドでバイオリン奏者として二週間ほど仕事をして小銭を稼ぐと、トリエステからやってきたイタリア系オーストリア人のバイオリニストと、ついにインドはボンベイへ。当地のカフェでデュオを組み、ニャーナティロカ自身が作曲したミュージカルをアレン

ジして演奏、その稼ぎで、ようやく一九〇三年、セイロンへと辿りついたというのである。

フランクフルトで音楽の修行中にたまたま入った菜食料理店で仏教に目覚めてから足掛け六年。いやはや、自らの魂の在り処とその安息の地を求めてのかくも長き遍歴の旅であることよと海旭は感じ入った。

「しかし、残念ながら、ここでは所期の目的は果たされなかったのです」碧眼比丘は往時を思い出したのか、いささか悔しげな口調で言った。「セイロンでは、キャンディ湖畔にある当地最大の寺院を訪ねました。一年か二年前にヨーロッパ人としてはじめて得度したというスコットランド人、アーナンダ・メッテイヤーの消息を知りたかったのです。彼からいろいろと教えを乞いたかったのですが……」

海旭は思わず身を乗り出した。

キャンディとは懐かしい。セイロンの古都で、さしずめ日本なら奈良か京都か、いや高地にあるので高野山か叡山か。あれは二十年前になる

だろうか、ドイツに海路留学の途次、セイロンはコロンボに停泊したおりに、訪ねたときの情景がまざまざと脳裏に甦った。コロンボの港から七十マイル、険しい山道をこえてゆく道中は箱根八里越えに似ていたが、椰子が鬱蒼と茂るなかに田んぼと茶畑が散在、水牛と山羊が草を食み、スコールという雲雨が脚下に湧き起る光景はまさに熱帯の別乾坤。キャンディ湖畔にある当地最大の寺院とは、おそらく仏牙精舎のことだろうが、そこにはわが浄土宗だけでなく、真言、天台の日本人僧侶が寄宿して修行に励んでいた。彼らはいまどうしているだろうか。

さらに海旭の関心を引いたのは、碧眼比丘が口にしたアーナンダ・メッテイヤーというスコットランド僧であった。彼の噂は、今目の前にいるニャーナティロカと共に海旭の耳にも届いていた。地味だがなかなかの器らしい。海旭はひそかに「歡喜慈」と漢語の法名をあてていた。いったいどのような人物なのか聞いてみたいと思ったが、すでに月中空から東に傾いて、か

これこれ二時間は経過しているようだ。セイロンの古都も英国高地出身の僧侶の話も後回しにすることにし、ここは碧眼比丘の語るにまかせることにした。

「すると、スコットランド僧はここセイロンではなくビルマの寺にいたといわれ、またまたいずれも三等車の船と鉄道を乗り継いで現地人の汗いきれとともに、ビルマへ辿りつきました。そして、メッテイヤーの仲介で「見習僧」となり、いよいよ僧としての修業がはじまったのです。その草庵では、メッテイヤーと室を同じくし、四、五ヶ月修行をして、クマーラ・マハーテラ師のもとで、ヨーロッパ人初の比丘となりました」といって一拍おいた。「しかし、それは修行僧としては一つのゴールでしたが、私にとつては学僧としてのスタートにすぎませんでした」

どうやらこれまでの話は交響曲でいえば序曲にすぎなかったようだ。これは明け方になるな、と海旭は覚悟をきめた。碧眼比丘はふうーっと

大きく息を吐き、つられて海旭も深く息を吸い込み吐き出した。ニャーナティロカの仏教に対する渴望にも近い憧憬に、海旭は感動を覚えた。しかし、感動しながらも、いっぽうで違和感を禁じえなかった。どこか、なにかが自分とは違う。

目の前の碧眼比丘には、南伝仏教に特徴的な、ストイックなまでの自己実現への希求が感じられた。それに対して、自分の場合はどうかだっただか。仏門に入ろうと思ったのはいつ、なにがきっかけだったか。

ニャーナティロカは往時を思い出したのか深く瞑目した。海旭もまた瞑目し、十五で得度したときの回想に引き込まれていった。

（この項つづく）

第五十四回

江戸を歩く



千住へ

大江戸ウォーカー
森 清鑑

日光街道

寛永寺黒門前の上野広小路から、突き出た土手に沿って右に曲がる。右側は仏具店が並び、左は寛永寺子院普門院の土手。山下から緩やかな坂道を北に上る。左手は寛永寺の子院がずらりと並んでいる（上野駅と線路）。子院に沿って北へ。町は山下から下谷車坂町へと変わる。東叡山寛永寺領の北端まで来ると、下谷坂本町になる。この日光道中（街道）を千住まで歩く。街道の左右には、家々がびっしりと並び、賑やか。家並みの外側には、金杉村と坂本村の畑が広がっている。やがて下谷金杉町。家並みを割って右にちよつと入ると真言宗竜泉寺。辺り一帯は竜泉寺村と呼ばれ、この村の東に吉原遊郭があった。明治になると樋口一葉がごく一時期、竜泉寺村に住み「たけくらべ」の着想を得る（一葉記念館と住居跡）。日光街道沿いの町が下谷金杉町から三之輪町に変わったところで吉原から

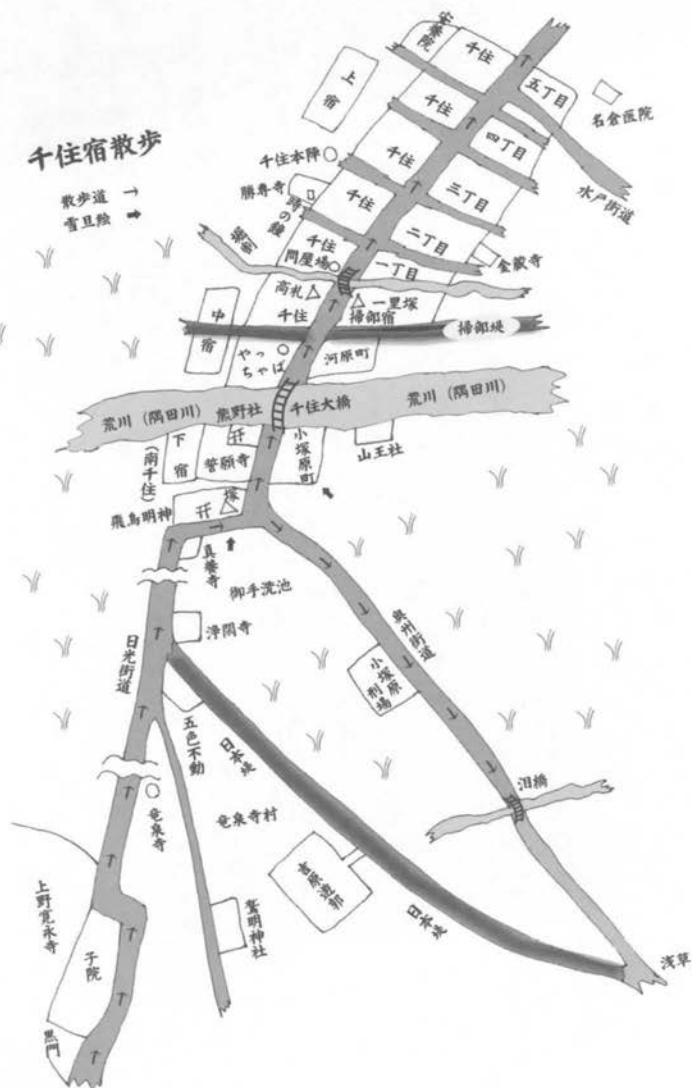
来る日本堤と交差する。この三角点の南にあるのが、江戸五色不動の一つ、永久寺目黄不動。北側にあるのが浄閑寺。通称、投げ込み寺。吉原の遊女が亡くなるとここに葬られた。日本堤は吉原への専用道路として造られ、盛り上がった土手道（堤）が畑の中を突っ切っている。堤に沿って音無川が流れ、その独特の田園美は広重の浮世絵に描かれている通りである。三角点近くから南にまっすぐ延びた道沿いに社がある。今日も西の市で賑わう。ちようと枡形の吉原遊郭の西裏に当たる。

飛鳥明神社

平尾一里塚の左を見てみよう。滝野川の畑日光道中をさらに北上すると、前方に飛鳥明神社（天王、小塚原天王宮とも呼ばれた）の石垣が見えてくる。その前、右手には真養寺境内と池。日光道中は飛鳥明神の石垣に沿って右に折れる。左手には、飛鳥明神の門と鳥居が見え、右手には門前町の茶屋が並んでいる。

千住宿散步

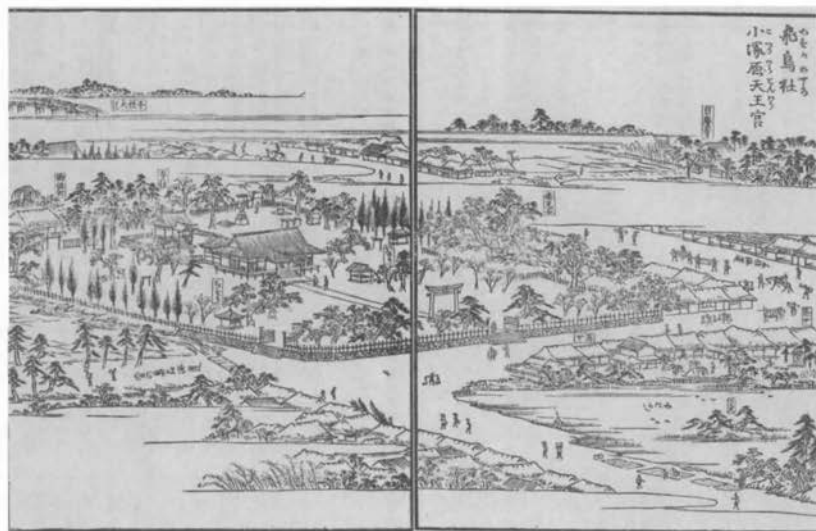
散步道 →
雪旦輪 →



◆散步図

る。飛鳥明神を参詣するとしよう。

鳥居を潜って直進すると正面に本社棟。その右手に小高い塚がある。塚の中腹にはなる石が突出して立っており、その上には注連縄が張ってある。この塚が重要な意味を持つ。いにしえのある夜のこと、この瑞光石が光を発したかと思うと、白衣を着た二人の翁が姿を現す。翁は（天王）と（飛鳥明神）であった。魂の降臨。人々は驚愕し、この神事を奉り神社を建立した。神社の名は、江戸時代には牛頭天王、飛鳥権現社（飛鳥明神社）、小塚原天王宮などと呼ばれ、明治以降は素盞雄神社となっている。そしてこの小塚こそが、辺りの地名、小塚原の起源となった。三年に一度の本祭は天王祭と呼ばれ、多くの御輿が繰り出され、京都の祇園祭のような疫病払いの大祭になった。神社の千貫御輿は幅広く町内を御渡りし、疫病を払う御輿振りは圧巻であった。この天王祭は現在もますます盛んである。



◆江戸名所図会 右下日光道中、飛鳥明神の石垣に沿って右に曲がる。左に鳥居、右は茶屋が並ぶ。鳥居の右上に小塚と瑞光石。図右中央が奥州街道（南北）。

飛鳥明神前を通り過ぎると広い道に出る。これが奥州道中（街道）で、左に曲がり北に行けば、すぐ千住宿、右へ歩けば浅草、隅田川沿いに出る。この辺りの情景は雪旦の鳥瞰図が一目瞭然である。

小塚原刑場

千住宿に行く前に右に曲がって奥州道中を南に下ってみよう。しばらく歩くと奥州街道沿いの右手に小塚原の刑場がある。周囲は全て小塚原の田圃である。小塚原刑場は、鈴ヶ森刑場と並ぶ江戸を代表する刑場で、ともに見せしめの意味もあつてか、通行人の多い奥州街道、東海道に接して在る。その規模は、街道に面して間口六十間（百八メートル）、奥行き三十間（五十四メートル）。ここで多くの罪人が処刑された。その数およそ二十万人。刑場は墓場を兼ねており、斬首された罪人の遺骸はここに葬られた。罪人の霊を弔うのが回向院であり延命寺である。吉田松陰な

ど安政の大獄で心ならずも処罰された政治犯は小伝馬町の牢獄で斬首され、遺骸はここに葬られたのである。吉田松陰の場合、高杉晋作を初めとする弟子達が彼の遺骸を掘り起こし、世田谷村の毛利藩下屋敷に会葬し直し、松陰神社を建立した。安政の大獄は、偉大な人物を闇に葬ったものである。松陰辞世の句「身はたとえ武蔵の野辺に朽ちるともとどめおかまし大和魂」。今日、刑場を二つに割った中央を常磐線が走り、北に回向院、南に浄土宗延命寺があり、延命地藏が鎮座している（南千住駅近く）。ここはまた一七七年、杉田玄白、中川淳庵、前野良沢、桂川甫周が、オランダから入手した解剖図の正確さを確かめるため、初めて罪人の腑分け（解剖）をしたところでもある。刑場を通り越してさらに南に少し歩くと、日本堤音無川の分流とぶつかる。ここに架けられている橋を泪橋という（現、明治通りと吉野通りの交差点）。これは東海道品川に面した、鈴ヶ森刑場の立会川に

架かる汨橋と同じで、ここで親類縁者は、最後の別れに涙し、罪人は刑場へと向かったのである。小塚原刑場は、浅草寺、上野寛永寺、あるいは吉原からもそう遠くないところに位置している。

千住下宿（南千住）

再び奥州道中を北に、飛鳥明神まで戻る。もうそこから北は千住宿である。千住とは、荒川から拾い上げた千手観音を崇め奉ったところからついた地名という。街道の左右には、旅籠が二層、三層と連なっている。町名は小塚原町。左手、宿場町を割って入ると浄土宗芝増上寺末、誓願寺、家康が立ち寄った寺である。右手に入ると、道はくねって荒川沿いに出る。そこに辺り一帯の鎮守、山王社がある（日枝神社）。茫洋として流れる隅田川の上流をこの辺では荒川という。帆立船や積荷船が頻繁に走っている。河岸には材木が林立。材木問屋である。宿場はここから北に展開し

ていくが、日本橋から歩いてきた旅人の中には、ここで一泊という人も多かったことだろう。特に江戸中期以降はこの岡場所で遊ぶ江戸っ子が増えたようである。しかし、千住宿の中心は、荒川を渡ってから北に長く続く上宿（北千住）にある。

千住大橋

芭蕉は元禄二年（一六八九）深川から船に乗り、千住に着く。大橋の麓で降りて六百里の旅に出る。行く春や 鳥魚の目は泪。

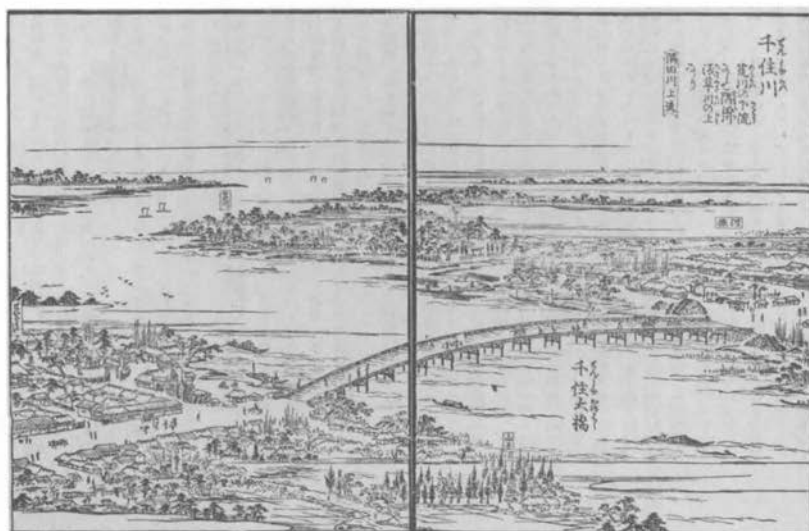
橋の前には、火除け地（広場）があり、その左手に熊野権現社。それから細長い千住大橋が始まる。江戸時代、千住大橋は橋長六十六間（約百二十メートル）に対して、幅は四間（約七メートル）であったという。

家康は江戸入府後、初めは江戸防御のため橋を架けさせなかった。したがって千住大橋は、家康が命じた、隅田川に架かる最初の大橋となった。時は一九九四年。施工責任者は

関東代官頭の伊奈忠次。彼は土木工事の大家。大変な難工事であったが、熊野権現に祈願し、見事に完成させる。当時の江戸っ子は単に大橋と呼んだ。しかし、その後、明暦の大火などもあり、避難に備えるため両国橋が完成。区別をつけるために千住大橋と呼ぶようになる。この橋は、最初の架橋後、江戸時代を通じて六回の改架が行われている。この間、流出が一度もなく名橋といわれる由縁である。この橋ができてから、日光、奥州、水戸の各街道が一挙に集まり、千住は物資流通の拠点として一層発展することになる。橋上には、駕籠、ぼてふり、旅人の姿が見える。橋上から滔々と下を流れる荒川の上流を見ると、遙か遠くに日光の連山が見える。これはスケールの大きな絶景である。

中宿、上宿（北千住）

長い橋を渡ると、再び広い火除け地があり、橋戸町に入る。広場に材木が積んである。橋



◆江戸名所図会 千住大橋 絵の左下、下宿。絵の右、橋を渡ると中宿、上宿。中宿、上宿（北千住）

の周囲方々に材木が林立。材木問屋の多さを物語る。小さな堀を渡ると河原町である。ここに江戸有数の「やっちゃば」（青物市場）があった。なにしろ周囲一面豊穡の畑。特に特産はネギ。遠くからも運ばれた野菜がわんさとここでさばかれる。戦災で焼失するまで青物問屋が街道筋に軒並み連なり、まさに壮観であった。まもなく、が東西を横断する。畑の中を盛り上がった堤が走る（荒川の水除堤として一六一七年完成）。その名は周囲の農地開発に尽くした石出にちなむ。掃部堤から先の宿場を千住掃部宿という。橋戸、河原、そしてこの掃部宿を中宿とも呼んだ。ここから宿場町の幅は街道を挟んで左右にぐんと広がる。周囲の地名も掃部宿。やがて、掘り割りにぶつかる。左に高札、右に一里塚。日光・奥州街道最初の一里塚である。この堀を渡るといよいよ本格的な千住宿が始まる。渡ってすぐ左に問屋場（貫目改所）があり、ここで運送の一切の管理が行われる。そこから

千住一丁目が始まり五丁目まで北に長く延びる千住上宿が展開。

千住宿はいうまでもなく品川、板橋、内藤新宿と並ぶ江戸の四宿。当初は千住一丁目から五丁目であったが、万治（一六五八年から）以降、掃部宿、橋戸町、そして千住大橋から南の小塚原町まで規模が広がっていった。千住大橋の北を上宿、南を下宿とも称した。幕末時、総合で人口約一万人、家数二千四百軒、旅籠五十五軒、本陣一、脇本陣一。大規模な宿場である。江戸四宿全てがそうであるように、岡場所（私娼歓楽街）も賑わった。娼妓は四百人前後で規模は内藤新宿や板橋宿よりも大きい。船頭の歌に「千住女郎衆はいかりか綱か 上り下りの船止める」とある。

上宿は丁目ごとに升目のように仕切られている。一丁目の北角を右に折れ、ちよつと歩くと右側に明治になって一時期、森鷗外が住んだ。父親が経営する医院があったのである。二丁目の細い路地を左に行くと浄土宗勝専

古き伝統技 三代にわたる信頼

浄土宗法衣専門

有限
会社

古島法衣店

〒111東京都台東区元浅草4の2の1
電話(03)384211289
振替0018002145231

寺。後醍醐天皇時代この開基の父が荒川から千住観音をすくいあげたという。境内にはえんま堂と千住宿の「時の鐘」があった。右に入ると金蔵寺。遊女の亡骸を供養した新義真言宗の寺である。

そして二丁目の北側仕切り道を左に曲がったところに本陣があった。本陣は大名や幕府役人の宿泊施設。敷地三百六十坪、建坪百二十坪。参勤交代でこの宿場を利用した大名は六十四家に及ぶ。

さらに三丁目、四丁目、五丁目と続き、千

住宿は終わる。五丁目の西側にある安養院は、將軍鷹狩りの際の安息所として使われ、その手前、東に入る道が水戸街道の出発点である。また、そのすぐ北に骨接ぎで有名な名倉医院があった。門前の広場には、遠来より治療に訪れた患者の駕籠や大八車がひしめき、門前列をなしたという。周辺の五軒の旅籠とも提携し、収容しきれない入院患者を治療した。時に將軍鷹狩りの休息所に利用されることもあった。今日でも長屋門等は江戸時代の名残を留めている。



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。

どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会



●通

〔特選〕通過する駅に盛りの藤の棚

増田 信子

各駅停車でないと停まらないような無人駅なのだ。駅前に藤棚があつて、見事な房を無数に垂らしている。ただ見つけたと思つたら通り過ぎてしまった。下車して棚の下を歩いてみたいような、そんな藤だろう。

〔佳作〕参道を通りし葬列寺薄暑

佐藤 雅子

椅子二三湖畔に通う風薫る

山崎遣迎子

紫陽花に隠されている通用門

鈴木真理子

●伝

〔特選〕村中が手伝い村の田植え終う

斉田 仁

農村の過疎化、農業の後継者不足はどんどん進んでいて、何かというと、助け合わなくてはいけなくなつて来ている。田植えも他と

重ならないように計画を立てているのだろう。
わが国の農業の問題はなど思ってしまう。

〈佳作〉

雨といを伝いて落つる青い梅

早乙女喜栄子

梅雨入りや廃駅にある伝言板

山内 桃児

梅雨夕焼けくせ字の目立つ伝言板

石原 新

●自由題

〈特選〉

青葉風格子囲いの如来像

中村 真一

山内のどこかにある脇寺だろう。小さい堂
で格子の前に賽銭箱があつて、格子はのぞく
までもなく拝める。何となく親しみやすさを
感じさせる。手を合わせると青葉風がやさし
く身を包んでくれる。

〈佳作〉

潮騒や一人に広き夏座敷

山口 信子

松手入れ妻の声して正午なり

井村 善也

放牧の牛が鳴きいる海霧の中

浜口 佳春



自由題

井染

兼題

浄土誌上句会の
お知らせ

誌上句会（編集部選）

■伝

伝統の子供神楽や半化粧
伝え承く寺の歴史や夏の風
御十念正しく伝え夏衣
セルを着て娼婦の伝を語り継ぐ
伝言はバナナのごとく曲がりけり
短夜に女あるじの武勇伝
伝説のように額紫陽花昏し
大袈裟に伝える身振り水母浮く

■通

紫陽花に傘あそびくる通学路
夕風や通はなんでも塩で食う

締切・二〇一三年九月二十日

発表・『浄土』二〇一三年十一月号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

●葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

■自由題

九輪草雨に滴り空に立つ
棚雲に見え隠れして慈悲心鳥
竹かごに受けて青梅香り立つ
夏蝶の羽を休めている葉裏
万緑や木魚の音に近づきぬ
側室の墓ひとひらの夏落葉
緑陰にたつぷり御坐す僧の墓
万緑や息詰めて見る大伽藍
どくだみに覆われてゆく地上かな
日傘して文士と志士の墓廻る
夏の木の木の札にある木の名前
木々緑濃すぎてしゃがむ墓の前
滴りを追えば無住の寺ひとつ

真昼間の密通グラジオオラスの丈
墓鳴くや交通事故故死0の日の
鮎色の南京通り李落つ
万緑の昭和の歌や通りゃんせ
大夏野貨車通過する無人駅
老鴛の鳴き止みし窓通り雨

小林苑を
工藤 掉
鳥羽 梓
内藤隼人
浜口佳春
石原 新

當間あさ子

佐藤雅子

早乙女喜栄子

山崎道迎子

工藤 掉

斉田 仁

鳥羽 梓

新藤由紀

大西智仁

金井 横

笠井亜子

神野ゆかり

秋山陽太

さっちゃんねネッ

かまち♡よろう



葦をかきわければ月の水面かな 岱潤

今年七月の国連総会で、十六歳のマララというバキスタンの少女が歴史的名演説を行った。彼女は昨年十月、スクールバスに乗っていて、TPP（タリバン武装勢力）から銃撃を受け、重傷を負った少女だ。二度の手術で奇跡的に回復した彼女は、十六歳の誕生日のその日、やはり武装勢力に暗殺された同国のブット元首相のシヨールを身にまとい、国連本部に登場した。

彼女はタリバンが、女子教育を禁止したり、女子校を破壊する行為を批判し、女性の教育の権利をブログ等で訴えてき

たことで、バキスタン政府から表彰され、逆に氏名の公表された彼女は、タリバンから命を狙われることとなった。
最近韓流ブームで沸き立つ東京の新たな久保街頭を、在日韓国人の人達に対し、「殺せ」「ゴキブリ」などと叫ぶ『ヘイトスピーチ』と呼ばれるデモが行われている。彼らは日本国旗を立て、警察官に護られながら、お店の従業員など女性に対し、のしりの言葉を浴びせている。彼らに對し法規制を真剣に考えるグループもあるが難しいようだ。

自分の意に反する者は殺してしまいたいという、タリバンやヘイトスピーチの彼らに、マララの言葉を贈りたい。

雑誌『浄土』
特別・維持・賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
藤谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養蓮寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(大本山清浄華院)
脚 博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山光明寺)
(敬称略・五十音順)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤光道

佐山哲郎

青木照憲

村田洋一

浄土

七十九巻九月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十五年八月二十日

発行 平成二十五年九月一日

発行人 佐藤良純

編集人 太室了皓

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五・〇〇一
東京都港区芝公園四・七 四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三三・五七八・六九四七

FAX 〇三三・五七八・七〇三六

振替 〇〇一八・八・八二八七

ホームページ <http://jodo.ne.jp>

「私の中で弱さ、恐怖、絶望が死に、強さ、力、勇気が生まれました。…本を手に取り、ペンを握りましょう。それが私たちに与えられた最も強力な武器なのです」
(長)



泰雲の

文と写真

浄土真宗東京東本願寺派
光徳寺・平井泰雲尼
茶道歴30年



美味探訪

旧暦の8月15日は中秋の名月いわゆる十五夜。今年は9月19日にあたるそうです。

「月月に 月見る月は多けれど 月見る月は この月の月」
(詠み人知らずの和歌) 月があれば月を愛で、雲に隠れたら「無月」、雨降れば「雨月」と読んで楽しむ。すべからく自然。月に誘われての体で、どこか気ままの旅に出たい季節です。

今月の美味探訪は、2000年3月に廃止になった東海道新幹線「ひかり」の食堂車・日本食堂の海老フライの思い出です。

東海道新幹線「ひかり」に乗ると、いつも席にいるより食堂車にいたことが多かった私。

それも日本食堂の新幹線を選んで乗車するのです。(当時、時刻表に食堂車の会社としてほかに東京ビュッフェ・帝国ホテル・都ホテルが明記されていました)。狙いは日本食堂の海老フライにありました。

細かなパン粉とタルタルソースの日本食堂の海老フライは私の好みで、メニューにはハンバーグセットやタンシチューセットなどある中、いつも海老フライを注文。

食堂車の車内アナウンスが入るやいなや、食堂車に向かい白布のテーブルクロス4人掛けのテーブルに座り、大きな車窓に流れる月の夜景を眺めながら食した海老フライは懐かしき良き時代の旅の思い出です。



新

刊

案

内



関東十八檀林 ガイドブック

いまよみがえる関東巡礼の旅



江戸時代に浄土宗僧侶の養成を目的として選定、創建された十八の古刹や名刹がついに一冊の本になりました。単立寺院となった二か寺を含む関東各地の十八の寺院を取材、その歴史から今に伝わるエピソード、さらにお寺巡りや団体参拝に役立つ周辺の見所や食事処、加えて詳細なアクセスマップに各寺院の基本情報も掲載された手元に置いておきたい待望の一冊です。また、巻末には江戸時代に十八檀林参拝の様子を記した摺門の『檀林巡路記』の現代語訳抄も掲載されています。

《十八檀林》

東京	増上寺	傳通院	幡随院	靈巖寺	靈山寺	大善寺
千葉	大巖寺	東漸寺		群馬	善導寺	大光院
茨城	大念寺	常福寺	弘経寺(瓜連)	弘経寺(結城)		
埼玉	浄国寺	勝願寺	蓮馨寺	神奈川	光明寺	

発行：関東十八檀林霊場会
A5版／カラー96頁
：800円（税込）

※本誌のお求めは、
法然上人讃仰会 電話03-3578-6947 Fax03-3578-7036
または各檀林寺院、浄土宗文化局でもお求めいただけます。